

北九州市立大学

文学部 紀 要

第 87 号

西南戦争揃物錦絵集成稿

—「方今有名録」、「鹿児島県人名録」(大阪・前田喜次郎編輯出版、明治十年三月御届)—

生 住 昌 大 ……………41

北九州市立大学文学部

比較文化学科

2 0 1 7

西南戦争揃物錦絵集成稿

―「方今有名録」、「鹿児島県人名録」(大阪・前田喜次郎編輯出版、明治十年三月御届)―

生住昌大

「方今有名録」について

明治十年三月、大阪の絵草紙屋前田喜次郎が、中判の揃物錦絵「方今有名録」の刊行を始めている。管見ながら、現存を確認できたのは、以下の四図である(以下、錦絵は私に並べた)。

方今有名録 二品親王有栖川熾仁公

(明治十年三月十三日版權免許)

方今有名録 陸軍少将谷干城君

(明治十年三月二十七日御届)

方今有名録 陸軍大佐福原和勝君

(明治十年三月二十七日御届)

方今有名録 内務卿大久保利通公

(※記載なし)

描かれた人物は、西南戦争に関わった政府の要人たちである。西南戦争に際し、有栖川宮熾仁親王は征討総督に就任したこと、谷干城は熊本鎮台司令長官として熊本城攻防戦を指揮して大功を収めたこと、福原和勝は数々の戦功を挙げたのち戦死したことが、錦絵中の填詞⁽¹⁾に記されている。大久保利通については、明治七年における台湾出兵戦後処理での功績で記述が終わっているが、やはり西南戦争に関わった政府要人の一人である。大久保が京都で政府軍を指揮していたことは、新聞報道によって知られていた。画工は、大阪の浮世絵師である二代長谷川貞信が務めた。

確認できたものの内で最も早く刊行された一枚は、「二品親王有栖川熾仁公」で、「明治十年三月十三日版權免許」⁽²⁾と画中には記されている。その他の二図は、「明治十年三月廿七日御届」となっている。

「鹿児島県人名録」について

版元の前田喜次郎は、「方今有名録」と同日の「明治十年三月廿七日」に、もう一種の中判揃物錦絵「鹿児島県人名録」の出版届けも済ませている。画工も「方今有名録」と同じく、二代長谷川貞信である。現存を確認できたのは、以下の十二図だが、次に並べる一覧には、画題が微妙に異なるものの、版元も画工も判型もその他の体裁も、「鹿児島県人名録」と全く同じくする「鹿児島県有名録 西郷息嬢」（42頁参照）も加えてある。よって計十二図となるが、この「西郷息嬢」の図については、次節で改めて触れたい。

鹿児島県人名録	桐野利秋
鹿児島県人名録	篠原国幹
鹿児島県人名録	村田新八
鹿児島県人名録	賊将村田新八弟村田三助
鹿児島県人名録	別府新助
鹿児島県人名録	淵邊高照
鹿児島県人名録	西郷隆盛ノ室
鹿児島県人名録	篠原の室 国子
鹿児島県人名録	陸軍大佐 野津貫道君
鹿児島県人名録	西郷小平 ※編輯出版人不詳
鹿児島県人名録	前原一格 ※田中安二郎版

* 鹿児島県有名録 西郷息嬢

以上の十二図中、「鹿児島県人名録 西郷小平」だけが、画中に版元の住所氏名を載せる欄は設けられているものの、無記載である⁽³⁾。ただし、画題も判型も画工も御届日も、そして画題を囲む意匠も、他の「鹿児島県人名録」と一致するため、ここに含めた。

また、版元が異なる「鹿児島県人名録 前原一格」の図もある。詳しく見れば、版元の住所氏名を記す枠自体は、版元前田喜次郎が刊行した「鹿児島県人名録」のもの（図1）だが、その「出版」^{（編輯）}と記された枠の上から無理矢理に「出版人 田中安二郎」の文字を重ねていることがわかる（図2）。その時期は定かではないが、ある時期から、田中安二郎が「鹿児島県人名録」シリーズの刊行を引き継いだことが推察されよう。

また、画題を囲む意匠は同じだが、その背景色を赤一色とし

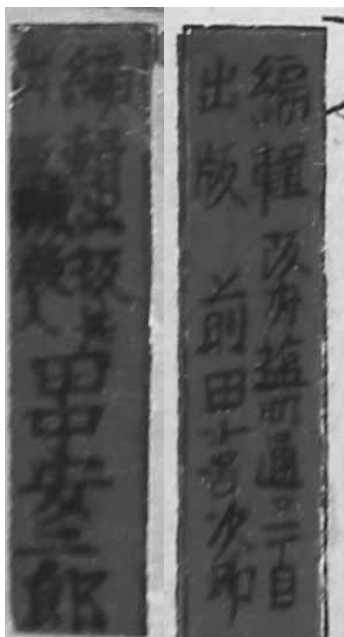


図 2

図 1

た前田喜次郎版(図3)と、赤、白、青の三色とした田中安二郎版(図4)、という違いも確認できる。ただし、田中安二郎版のものは、この「西郷小平」の一図しか確認できていないため、現段階では何とも結論しがたい。

なお、ここに西郷隆盛を描いたものがないが、現段階で現存の確認は取れていない。摺られていないのではなく、現在は散逸してしまっていると考える方が自然であろう。



図4

図3

「方今有名録」と

「鹿児島県人名録」との関連性

「方今有名録」も「鹿児島県人名録」も、現段階では揃物として提示するには不完全だが、それでも現存するものから、両シリーズの関連性を、以下に述べてみたい。

一瞥して知れることは、「方今有名録」は西南戦争に関わった「官軍」側の要人を描き、「鹿児島県人名録」は「賊軍」側の諸将を集めた揃物として企画されたものであったであろうということである。二種の揃物としたのは、「方今有名録」という画題の下に「賊徒」たちを描くことはふさわしくない、との判断があったのかもしれない⁽⁴⁾。「賊徒」たちは、「人名録」の画題の下に集められている。

しかし、この編集方針にそぐわない例外が一図ある。「鹿児島県人名録」陸軍大佐野津貫道君が、これに該当する。「官軍」の将であるにもかかわらず、「賊軍」の諸将を描く揃物の一つとして描かれているのだが、この例外をどのように把握すればよいだろうか。

例えば、「鹿児島県人名録」には、「鹿児島県人名録」「鹿児島県人名録」「鹿児島県人名録」というように、画題表記の揺れが見られる。現代人の感覚では、タイトル表記は統一してしめるべきものだが、当時はそうしたことは無頓着であった。同様の事例は、この時代の出版物全般にしばしば見られ、珍しいことではない。

そうした明治初期の出版界のだらかさの中で、本来は「方今有名録」シリーズ中に描かれるべき「陸軍大佐野津貫道君」が、誤って「鹿児島県人名録」の画題の下に描かれてしまった。そう単純に理解してよいのではないか。そもそも本図においては、最も注意が払われるべき人名からして、誤りを犯してしまっ

いるのである。「陸軍大佐野津貫道君」と記されたその人名は、正しくは「陸軍大佐野津道貫君」⁽⁵⁾でなければならなかった。これと同様のことが、一つだけ画題が微妙に異なるにもかかわらず、前節で「鹿児島県人名録」シリーズの一枚として数えた「鹿児島県有名録 西郷息嬢」についても言えよう。本図も、本来は「鹿児島県人名録」としなければならなかったところ、同時期に刊行していた「鹿児島県人名録」と「方今有名録」の画題を混同し、誤って「鹿児島県有名録」としてしまったように思われる。

西南戦争関連の錦絵は、見て楽しむ娯楽性と同時に、戦況や「官」「賊」双方の人物たちの情報をいち早く伝える速報性も求められていた。また、この速報性は、他の版元に先行して販売し、より一層の売り上げを得るためのものでもあっただろう。いずれにせよ、上述の二図の事例は、当時の出版界の大らかさと合わせ、刊行までの慌ただしさが招いた誤表記でもあっただろうと想像させられる。

繰り返しになるが、以上述べ来たったところは、あくまでも現存するものから述べた推論である。さらなる新資料発見の日を待ちたい。

新聞記事との関連

こうした人物画の填詞は、西南戦争錦絵の例に漏れず、その

情報源を訪ねれば新聞記事に辿り着く。例えば、「方今有名録 陸軍少将谷干城君」の填詞は、明治十年五月十日及び翌十一日の『大阪日報』記事がその基となっている。長文に及ぶため、記事冒頭部分のみを、引用箇所には傍線を施して以下に引用する。また、これに続けて、錦絵の填詞を並べて記す。

明治十年五月十日『大阪日報』記事（冒頭）

○熊本孤城に嬰守して能く其功を奏し、名を宇内に轟かしたる谷少将の来歴を、日々、曙の二新聞に得たり。因て其大要を抜萃して、左に登録す。

谷干城君は幼名を守部と称し、江戸に於て安井息軒翁に就て儒学を修められしに、翁君の卓犖不羈の性質にして非常の国器たるべきを知り、教育殊に懇篤なること我子のごとくせられしに、君も其懇篤なるに感激して、また翁に奉事すること父の如くせられしは、当時より間もなく世の美談とする所なりき。学業既に成り、帰藩せられて小監察を命ぜられ、游学に托して諸国を歴観し……（※句読点は引用者）

方今有名録 陸軍少将谷干城君（冒頭）

干城君は本国高知にして、幼名を守部と称し、性質卓犖不羈にして、非常の国器たり。修学に長じ、帰藩し小監察を命ぜられ、……

この『大阪日報』記事の前書き部分には、「谷少将の来歴を、日々、曙の二新聞に得たり。因て其大要を抜萃して、左に登録す」とある。実際に、『東京日日新聞』では五月三〜五日の三日間、『東京曙新聞』では五月四、五日の二日間、谷干城の略歴を載せている。『東京日日新聞』記事は、「○谷干城君の来歴を委し（脱字）聞くことを得たれば筆記して是を左に載す」と前置きし、『東京曙新聞』も「……陸軍少将谷干城君の略伝を同県なる或紳士に聞く所左のごとし」と前置きの後に、記事を始めている。両紙の記事は酷似しており、情報の出所は同じだと推察される。

ただし、細かな表現を追っていくと、『東京曙新聞』記事を抜萃した『大阪日報』記事に基づいて、「方今有名録 陸軍少将谷干城君」の填詞が編まれたことが知れる。なお、その他の三図については、典拠記事を確認できていない。他の新聞や雑誌等の更なる調査が必要である。

一方の「鹿児島県人名録」の中にも、『大阪日報』記事に基づいて填詞が編まれた図があるが、『大阪日報』以上に、前田喜次郎が刊行した『鹿児島県戦士銘々伝』（明治十年四月十五日御届）という外題を持つ草双紙が、揃物錦絵「鹿児島県人名録」の派生（あるいはその成立）に密接に関わっていたようである。届け日と実際の出版日は異なるため、錦絵と草双紙のどちらが先行して刊行されたかについては、慎重な検討を要する。仮に、届け日通りに錦絵が先行していたとするならば、〈錦絵の草双紙化〉の一

例となる。逆に、草双紙が先行していたならば、〈草双紙の錦絵化〉の一例となるのだが、紙幅が尽きた。次号では、揃物錦絵「鹿児島県人名録」と草双紙『鹿児島県戦士銘々伝』の関連性を追い、「賊徒」を語る際の語り口についても、解説を加えたい。

【注記】

1 高木元「十九世紀の絵入メディア——錦絵の（填詞）をめぐる」（『国語と国文学』92巻2号、平成二十七年五月）において、本来は中国の詩文形式の名称であった「填詞」が、十九世紀半ば頃から、錦絵の賛や解説を表す語として次第に定着してきたことが示されている。

西南戦争錦絵の最もよく知られた判型は大判三枚統だが、この場合、絵の解説文は画面上方に文字枠を伴って記されるものがほとんどである。筆者はこれまで、文字枠の中に記された解説文を「詞書」や「頭書」と読んできた。ただし、西南戦争錦絵の中でも、特に一枚摺りの物によく見られるのだが、絵の余白全体にわたって書き込まれた解説文の文末には、「填詞」と記されているものが多い。したがって、本稿では、「方今有名録」や「鹿児島県人名録」の絵の余白に記された解説文を示す用語として、「填詞」の語を使用した。錦絵に記された文字情報を示す用語については、引き続き検討を行っていく。

2 明治八年九月改正「出版条例」で、「三十年間専売ノ権」としての「版權」が設けられ、「版權ヲ願フ者ハ願書ヲ差出シ免許ヲ請フベシ」（第二条）とされた。ただし、「彫画ノ類ハ出版スル毎ニ届ケ出ルコト第一一条ニ依ルベシ／但（マズ）板權ヲ与ヘズ」（第二十八条）とある。本図は、版

「権免許」ではなく、「御届」の誤りであろう。

なお、「出版条例」の引用は、別所平七翻刻（明治八年九月改正 飯名附）出版条例并罰則及庶願書式（明治八年九月）に拠った。

3 図書と同様、錦絵刊行に際しても、版元の住所・氏名を記載しなければならなかったようだが、版元無記載の錦絵を見かけることも多々ある。

4 ただし、後に版元の前田喜次郎は、「賊将」たちを「有名十八史略」(明治十年十月御届)という画題の下で描いた挿物も刊行しており、「有名」という文言への配慮も、その程度のものであったことを付言しておく。

なお、「西郷小平」の図の填詞には、「熊本国界を暴棄なす一方の將」と英名を鳴らし」（傍点引用者）とある。この記述が、注記3で記した本図における版元無記載と、何らかの関わりを持つのだろうか。

5 野津道貫（二八四—一九〇八）明治時代の陸軍軍人。薩摩（鹿児島）出身。野津鎮雄の弟。西南戦争では征討第二旅団の参謀長。（『国史大辞典』より抜萃）



「方今有名録」

中判錦絵揃物。前田喜次郎編輯出版（大阪塩町通三丁目）。画工二代長谷川貞信。四函存。「明治十年三月十三日版權免許」（二品親王有栖川熾仁公）と「明治十年三月廿七日御届」（その他）の二種あり。価格不詳。

西南戦争に関わった「官軍」側の諸将を描いたシリーズ。

「鹿児島県人名録」

中判錦絵揃物。前田喜次郎編輯出版（大阪塩町通三丁目）。画工・二代長谷川貞信。十二図存。全図「明治十年三月廿七日御届」。価格不詳。

西南戦争に関わった「賊軍」側の諸将を描いたシリーズ。ただし、一図だけ、「官軍」側の将「陸軍大佐 野津貫道君」を描いたものが確認されている。

なお、前田喜次郎から本シリーズの刊行を引き継いだと見られる田中安二郎版「鹿児島県人名録 前原一格」、本来は本シリーズの一つとするはずだったと推察される「鹿児島県有名録 西郷息嬢」も存し、これらを含めて「十二図存」とした。

凡例

- 一、掲載図の所蔵元は、図の下に記した。
- 一、掲載順は、私に定めた。
- 一、表記は、読み易さを第一義とし、以下の通りとした。

- 1 句読点 私に句読点を施した。
- 2 踊り字 単数の場合、平仮名は「、」、片仮名は「、」、漢字は「々」に統一した。
- 3 傍訓 脱字や私に付した傍訓は（ ）内に、歴史的仮名遣いによって示した。その他、清濁の誤り、送り仮名との重複などは補正し、注を付した。
- 4 字体 漢字・仮名ともに、原則として通行の字体に改めたが、正字、旧字体、当時の慣用的な字遣い、当て字を残したものもある。
【例】脊後（背後）、先鋒（先鋒）、引卒（引率）
- 5 仮名遣い 資料のままとした。
- 6 仮名の清濁 私に補正し、必要に応じて注を付した。
- 7 誤字 明らかなものは訂し、単なる誤字に留まらないものについてはそのままとし、それぞれ注を付した。
- 8 脱字（ ）を付けて補った。
- 9 判読不能の文字 該当する文字数分を□で補った。
- 10 注記 ▼の下に記した。



北九州市立大学所蔵

方今有名録 二品親王 有栖川熾仁公

二品親王有栖川熾仁公は智仁兼備の有名にして、永く叙慮を易じ、叙任暁陽の如く進み、元老院議長に昇任し、于茲明治十年鹿兒島藩挙動沸発の際、征討総督の命を蒙られ、同年二月進発して、大阪本願寺を本営とし、隊を卒いて天旗を西南に翻し給ふより鎮静。万民を安居の時いたらしむ寛仁の君なり。第は東京祝田町に有り。

▼「茲于」を「于茲」に訂す。

▼「証討」を「征討」に訂す。

▼「祝田」を「祝田」に訂す。



北九州市立大学所蔵

方今有名録 陸軍少将 谷干城君

干城君は本国高知にして、幼名を守部と称し、性質卓犖不羈にして、非常の国器たり。修学に長じ、帰藩し小監祭を命ぜられ、桜田変の後、藩主山内容堂公の国難を愁ふを修め、戊辰の役に高知藩兵小軍監となり、東山道の先鋒として至る処捷を奏し、長駆して会城を突進なし、奥羽平定の功成り、賞典若干を受け、朝旨陸軍少将を拝し、熊本鎮台の司令長官とす。嚮に佐賀の賊動起るや、自若として虚に乗せず、現に鹿兒島強兵熊城を迫るといへども、重圍に抗抵しがたく、国界の軍を解いて散滅せしは、此君の深謀、日を経るによる所にして、実に天性沈深、豪毅の名將と挙て賞説を輝し給ふ。(注記は41頁)



東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵

方今有名録 陸軍大佐 福原和勝君

英士は本国山口にして、稍西南暴動戦巷に日を追ひ、勝星を頂き、勇氣最も猛く、只管官に功を奏し万敵を裂いて、馬烟朦々と渦巻き縦横に馳せ、鬼兵を退ぞけ賊心を挫き、進むを専らにし引くを採らず。終に南の関の大学を期し、後世の宿志、死虎の本意を射て、爽かに討死せられしは、実に報国の名士と、陣中掌を柏つ。

▼「頂き」を「頂き」に訂す。



北九州市立大学所蔵

方今有名録 内務卿 大久保利通公

参議従三位大久保卿は、固薩州太守侯の藩士にして、累年国務に勤勞し給ひ、東西に奔走し、遍く王室に尽力し、慶応年間幕府長征の際、卿太守の書を幕府に呈し、其当を得ざる意を陳て衆軍を挫き、尋て二条城幕府に迫り、政權返上を促し、復古の基本を啓き、明治元年叙任参与より従三位参議に進み、内務卿を兼任せられ、賞典禄永世八百石を賜ふ。后ち支那の事起り、彼地に使其大臣に应接し、償金を得て帰朝まし、衆人をして感動令られ、一万円褒賞を賜ふ。邸は東京永田町に在り。

▼「候」を「侯」に訂す。



北九州市立大学所蔵

人名録 桐野利秋

利秋は本国鹿児島にして、強勇なりと雖も策略に疎く、前名中村半次郎と称し、猛威を張り、新撰党を闇殺せし伊藤武明の同盟を伏見の邸に潜伏なさしめて、復讐の名を抱き、会津の兵を撃んと、慶応年間突然と幕軍に鋒を交へ、伏見の隊長にして諸隊を鼓舞し、尋て東征に若松城を降し、軍功天下に雷名を挙げ、正五位陸軍少将に任ぜられしを、何れか不満として、き国の末西郷と謀り、自己の勇を促し輕拳の師をひらき、官位を褫れたるは、勇余り其智足らざるものか。

▼「猛威」を「猛威」に訂す。(41頁に続く)



北九州市立大学所蔵

人名録 篠原国幹

篠原国幹は温良篤実、沈深の勇あり。軍略兵学に長じ、西郷氏も機密を談ずるに、正堂と兵を御す。伏見の戦争に徳川の兵を大阪へ追出したる薩兵の隊長は、此国幹なり。后ち上野に屯所し、黒門よりの撃破及び攻城野戦に致功あり。其後陸軍少将に昇り、近衛兵の長官たり。今日西郷桐野退官に連諾し、輕拳に鋒をふるふて、昔前の英名を癡絶なすは、何の至功なるや。



鹿児島県立図書館所蔵

鹿児
人名録 村田新八

今度西南暴動の将名に加端し、漢勇の徒にして、数ヶ所に鋒を交じへ、一層憤戦なし、賊陣の為に功を積んで、頻りに国界を分たんと欲す。官軍大挙の一戦にむかひ、撃術を琢磨なす折柄、山壁に響き木の葉を削る炮一声伝へ、流丸直ちに新八が膚に適し、忽ち鞍を覆へし重傷に敗す。嗚呼、此機あらんは必然たるを、早く焼眉の誤を解かん乎。

- ▼「琢磨」の傍訓「みかぎ」を「みがき」に訂す。
- ▼「直ちに」の傍訓「ただち」を「ただ」に訂す。
- ▼「焼眉」は「焦眉」、「燃眉」に同じ。危険や解決すべき事態が迫っていることのたとえ。



北九州市立大学所蔵

鹿児
人名録 賊将村田新八弟 村田三助

明治十年二月西南蜂起の撃場、熊本国山鹿口の劇戦に、官軍近衛兵を脊後に追め、飄然たる流弾丸に適して戦没せる、賊党一方の魁首たる村田新八の弟にして、歎惜落胆、血を洩りて烈勇頻りに奮ひ、一息憩ふ閑を待たず、数ヶ所の薄手を屈縮せず憤逆。急を奔るといへども、微運只管其身を攻め、功を脱して敗を招き、兄弟嗣準と戦没なせり。傷哉、国権輕蔑の徒。

- ▼「村田三助」村田三介(一八四五—一八七七)。正しくは、「高城七次の弟」(『西南記伝』より)。
- ▼「飄然」を「飄然」に訂す。



北九州市立大学所蔵

艶人名録 別府新助

近頃迄陸軍大佐の任を被き、性質権名を恣ま、にし、西南争撃に将名を發し、孤勇に誇りなし、明治十年二月廿六日、福岡鎮台兵四千有余、久留米へ押出す挙に続き、高瀬、木ノ葉より寺田、扶間村、所々の出兵に向ひ撃術を練り、官兵に迫ること度を重ね、勇烈却て勝を机らず、茂林乱軍の錐目を潜る銃丸、飄然と新助の膚を貫ぬき、道街に斃れ、一塊の勇名を血□に流す。嗚呼、時運未だ満懷せざるをや。

▼「飄然」を「飄然」に訂す。

▼「錐目」は「錐眼」の意。錐であけた穴。ここでは、わずかな隙間。



北九州市立大学所蔵

艶人名録 淵邊高照

淵邊高照は、明治西南争乱の際、西郷隆盛に属し、勇を治國に奮ひ、賊将一旗の許に出、同盟別府の党と合会し、外徒を遙に招き、新募兵と号し、一千有余の隊を促がし、国民を蠱惑なさしめ、熊本国界八代城外三面より襲来し、官軍に鋒を交へ、不慮の撃戦五六次憤逆、時を移し勇尽、炮声鈍りて、官兵の為に屈縮し、隊を古麓口迄追迫せられ、忽然と鋭氣を翻し、再度一挙を顧、終に小川口にて敗走散乱なす。此徒乎、北辰衆星の語に叛じて、闇撃一犬の虚万吼を伝ふるの器にして、暴名を普国に輝かすを如何とせん。

(注記は41頁)



北九州市立大学所蔵



筆者所蔵

鹿児人名録 西郷隆盛ノ室

翌日ありと思ふころの仇桜、夜半の嵐に誘ひ来る、炮声耳を貫ぬくと、夢驚かす深閨に、西郷隆盛の室なるは、今時戦争日を経るより、そも我が夫の堺を分ち、機により変に肺肝を碎き、智勇欣然たりと雖ども、或は野臥草枕、夜攻に肘も曲やらす、激風膚を削らんを、遠く沈着なすよしなくと、稍春色も移ろひて、巷の花も一時に綻び、馥郁として女隊を繰出し、一方開く進撃は、国恩不弁の隊長なるか、貞操烈婦の亀鑑なるや。街説芬々と未詳の談は、虚を推し証を獲ざる而已。

▼「室」は、貴人の妻。奥方。内室。(41頁に続く)

鹿児人名録 篠原の室 国子

茲に篠原の細女なるは、女隊一方の道を開き、夫乞ふ沼の離れ鴛、氷の衾踏脱で、雪の旦に鹿児島を、跡に見なして潔よく、翅を粧ふ出陣は、白刃を朝陽に閃めかし、修羅の巷を盲明と、突入りく、血汐は衣に時ならぬ、花紅ひと続なして、敵の雲霞を分けつ、も、さも映兆たる景況は、頼みの陣に募集なすは、戦没勇士の枕の斤破れ、又これ貞操と賞すべきや、国害愧婦と呼ぶべきや。可否は灯火の理論を待つ。

かくとだに過にし花に契りしを

けふに散なん風のいたづら

(注記は41頁)



蔵所文庫誌新聞明治附属部法学部東京大

鸚人名録 陸軍大佐 野津貫道君

貫道君は本国鹿兒島にして、軍略に長じ、壮勇拙んで一方の一将たり。茲に熊本県下の戦情、高瀬より山鹿まで賊を追撃。入乱れたる軍中に、賊方一員の強者有つて官陣の聯隊旗を掠奪なすを、野将遙かに見認め、是を掴み去るや官陣の恥辱一大□と馬を飛して、薩兵憤烟の中に突入り、賊卒數頭を斃し、御旗を我手に採返し、悠々然と官陣へ手綱を繰られしは、西討無二の英勇と賞し、此君各所の苦戦、誠功の枚挙は人口に著くするに譲す。

- ▼「野津貫道君」及び「貫道君」は、「野津道貫君」、「道貫君」の誤り。
- ▼「掴み」の傍訓「つかみ」を「つか」に訂す。



蔵所図書館県立島兒鹿

鸚人名録 西郷小平

西南陣長隆盛の縁族にして、猛勇衆に越へ、熊本国界を暴襲なす一方の将と英名を鳴らし、突戦術を尽し、官軍塁を抜けば退ぞいて二塁に現はれ、嶮頂を滑らかに奔りて弥々進み、万兵を悩ますに、熱心挫く閑なく訊進なすと雖へども、前後の接兵を囲んで巢窟に帰るあたはず。重傷泉下に導き、紅糊其身をまとふて賊旗の下に斃れたるは、浅智枚挙の一徒。惜悪の界説を定めず、浮名芬々と追評を乞ふのみ。

- ▼隆盛の三弟。「小平」とも表記するが、「小兵衛」が一般的。
- ▼「巢窟」を「巢窟」に訂す。
- ▼「紅糊」は「血糊」の意。のりのようにねばねばする血。



北九州市立大学所蔵

鹿児島県人名録 前原一格

前原一格は壮勇烈戦の一人にして、曩年山口県下に軽謀を企発したる同姓一誠の末弟なり。其功成らざるより疾く、何れに潜匿したるや。天網を逃れ其行跡詳にせざるを、今期西郷隆盛一朝の叛戦を開く機に臨んで、一格の姓名を白布に著明し身に帶て、突然と一隊の先鋒に出る憤戦、飛鳥の如く翅り、勇撃を轟かす。薄手を屈せず益々向ふに、我手勢を踏跡して進む。其功を官陣の為に奏せば、鬼兄の嗅名を酬いて英名末世に潔輝なすを。

- ▼「前原一格」は架空の人物。
- ▼「軽謀」の傍訓「せいぼう」を「けいぼう」に訂す。
- ▼「成らざる」の傍訓「なら」を「な」に訂す。(41頁に続く)



東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵

有名録 西郷息嬢

本隠れにまだ十六宵へる月の黛、芙蓉の姿媚やかに、をくれぬ露とをき惑ふ、心さだめて物具を、粧ひ出て行く先の、敵は誰とも不知火の、筑紫ちかくに父を慕ひ、弾丸射的の雨を凌ぎて、女隊一個の勇をふるうは、孝女功をなすやいかに。

散りかかる花心あるながめかな 西南山人

- ▼「月の黛」は「月の眉」の意。三日月の異称。
- ▼「芙蓉の姿」は、蓮の花のように清楚で美しい姿。
- ▼「不知火」は、国名「筑紫」にかかる枕詞。また、上からの叙述「敵は誰とも」を受けて、「知らぬ」の意味もかかっている。
- ▼「筑紫」を「筑紫」に訂す。

【翻刻注記の続き】

方今有名録 陸軍少将 谷干城君

▼「干城」を「干城」に、傍訓「たけき」を「たてき」に訂す。

▼「卓犖不羈」の傍訓「たくなんふは」を「たくらくふき」に訂す。他よりすぐれていて、何ものにも束縛されないこと。

鹿見 人名録 桐野利秋

▼「新撰党」＝新撰組。局長近藤勇。浪士組を経て、文久三年結成。

▼「伊藤武明」＝伊東甲子太郎（一八三五―一八六七）。諱は武明。新撰組参謀、のち御陵衛士。慶応三年、新撰組によって襲撃され、闘死した（油小路事件）。桐野利秋は、生き残った御陵衛士を薩摩藩邸で庇護した。

▼「新撰党を闇殺せし」は「新撰党に闇殺せられし」の誤り。

▼「軍功」を「軍功」に訂す。

嘉永 人名録 淵邊高照

▼「北辰衆星」を「北辰衆星」に訂す。「北辰の其の所に居て、衆星の之に共（むか）ふが如し」（『論語』為政第二の一）。

▼「一犬の虚万吼を伝ふる」は、「一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う」に同じ。一人がいいかげんなことを言い出すと、世間の多くの人々は、それをほんとうのこととして広めてしまう、という意味の諺。

鹿見 人名録 西郷隆盛ノ室

▼「仇桜」は、はかなく散る桜。また、はかないもののたとえ。

▼「深閨」は、婦女の寝室。

▼「肺肝」の傍訓「ばいかん」を「はいかん」に訂す。肺臓と肝臓。転

じて、心の中。

▼「分かち」の傍訓「わか」を「わ」に訂す。

▼「馥郁」は、香気の盛んにかおるさま。

鹿見 人名録 篠原の室 国子

▼「離れ鴛」は、鴛（雌）と離れた鴛（雄）。ここでは、出陣して離れてしまった夫の篠原国幹を指す。

▼「氷の衾」は、ここでは夫が居ないこと。仲むつまじい男女が共寝をする夜具、男女共寝のことのたとえに「鴛鴦（えんおう）の衾」がある。

▼「映光」は「窈窕（ようちょう）」の意。しとやかで奥ゆかしいさま。美しくたおやかなさま。上品なさま。

島見 人名録 前原一格

▼「天綱」を「天綱」に、傍訓「てんこう」を「てんもう」に訂す。天が張りめぐらす綱。

【附記】

本稿をなすにあたり、鹿児島県立図書館、東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫、北九州市立大学より資料の掲載許可をいただき、大庭卓也氏、佐々木亨氏からはご助言を賜りました。記して御礼申し上げます。

また、本学資料の撮影と画像編集、「方今有名録 有栖川熾仁公」の翻刻は、本学文学部比較文化学科一年の藤原妃南乃による、勉強会での成果です。

なお本研究は、JSPS 科研費 JP15K16694 の助成を受けたものです。